
レジェンド・オブ・クリープオ

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジェンド・オブ・クリープオ

【Nコード】

N5145F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

この物語は聖剣の姫君の世界を下履きにして書かれた短編集です。本編との繋がりはなく、あくまでそこに描かれた登場人物がどのような人となりかを明らかにするために描いたものです。

彼女の記憶くアルバート少年の日記く(1)彼女との出会い(前書き)

聖剣の姫君本編でも登場するギルドの導師、アルバート・レディ
ーザ・ホーキングの少年時代を描きます。ベルディナ・アーク・ブ
ルネスとの出会い。彼が魔導師の道を志すきっかけを描きます。

彼女の記憶＜アルバート少年の日記＞（１）彼女との出会い

彼女は酷く気むずかしい、人見知りをするくせに途方にもなく寂しがり屋だ。表向きは傍若無人に振る舞うくせにいつもその内には不安や恐れを蓄えている。

私がそんな彼女と出会ったのは、学園の卒業後をどうするかという岐路に立たされていた時だった。

魔法ギルドの魔法学園を卒業した後、私には二つの道が用意されていた。一つはそのままギルドに残留し一流の魔導師を目指す道。もう一つは生まれ故郷に帰り職を探すと言う道。

魔法ギルドの魔法学園を卒業という肩書きは絶大なもので故郷での職探しに困ることはない。父は私を官僚にしたかったらしいが、あいにく私にはそれに魅力を感じることは生涯なかった。

考えれば考えるほど混乱していく頭を休ませる時、私は決まって同じ所へ足を運ぶ。

魔法学園の敷地を外れた小高い丘の上。魔法都市を一望するには高さが足りないが、それでも雄大な景観を楽しむことが出来る。

私は長く伸びた木の影に腰を下ろすと、一息ホッと溜息をついた。ここは良い。この景色を見下ろしていれば今まで自分が悩んでいたことがどれほど小さなことかと思えるようになる。それがここにいる一時に過ぎないものであっても、これが至福の時であることには変わりない。

日没が近く、夜の到来を知らせる僅かに冷めた風が木の葉を舞わせ、若草の絨毯に波を作り駆け抜けていく。

若草の波を目で追う私の視線はその先にある何かを捉えた。

それは、まるで陶器人形の置物に感じられた。私の方から見えるものは長く伸びた銀の髪が覆い尽くす、酷く小柄な背中だった。日の光を背後に受け、その銀糸は特上の細工のような美しさと未だ未完成であるための儚げさを私に伝える。

君は、いったい何者なのだ。私がつい漏らしてしまった声は風に流され彼女の耳に入った。私の方へと向けられる金色の双眸はまるで異質なものを見るような怪訝さには包まれていなかった。ただ、何も映していない。私という存在を認識していないのだろうか。しかし、その様子にはどこか不快を感じているようにも感じられた。

彼女は無言で立ち上がると、私をまるで警戒しながら見つめつつ私から遠ざかるように一歩一歩視界から外れていく。

私はそれを追う気にはなれなかった。彼女が作り出していた世界を壊したのは私だ。ただ一人でいたい時を見知らぬ誰かに壊される不快さは私もよく知る。そのため、彼女を追う気にはなれなかった。ただ、一つだけ。また彼女に会いたい、ただそれだけを思っていた。

彼女が去っていった後に残された余韻は、日没により冷やされた大気に溶け込み消え去った。

（２）私だけの秘密

卒業研究の課題をもう決めたかと友人のサムとエダに聞かれたのは、丘の上に居た少女はいつたい何者なのだろうかと考えていた時だった。

卒業過程。卒業を一年後に控えた私たちにとってその課題は非常にホットなもので、見れば周りでも食事を取りながら談笑している学生の話題の多くがそのことに関するものだった。

基本修学過程を終えた学生は、最後の一年を使って卒業までに何らかの課題をこなし論文を提出しなければならない。そのためには、ギルドに所属する現役の導師の研究室に一年間の限定の研究生として配属され、その導師が与える課題を研究しなければならないのだ。故に、どの研究室がいいか。自分がしたい研究は何処で行われているか。どの研究室が楽で導師の評判がよいか。等々、話題に尽きることはない。

先日講堂で行われた各研究室の説明会に参加したが、これと言って私の興味を引くものはなかった。いや、ただ一人だけいた。その方は何で自分がこんなことをしなければならないのかという表情を隠すことなく、非常に面倒くさそうな口調で研究室の説明や自分が何を研究しているか、今年はどのような課題に取り組んでもらう予定かを説明していた。

私は、彼を見た時何故か彼とは気が合うのではないかと直感し、あの者の研究室に希望を出そうかと考えるようになった。

ベルディナ・アーク・ブルーネス。

その名を出した時、友人達の目が驚愕に剥かれたことは良く記憶している。それほど優等生ではない私にはギルドの動向を調べる余裕などなく、今では恥ずかしいことだがその人物がいつたい何者なのか分からなかったのだ。

友人達は呆れて私に説明してくれた。

導師ベルディナは、ルーヴァン・ヘウンリーク大師父と共に現在のギルドを再建した偉大な大導師であり、その威光は世界に響き渡る。

それを聞かされては流石に驚愕せざるを得なかった。しかし、既に希望調査を提出してしまったために後には引けなかった。

ベルディナ大導師のラボの定員枠は僅か一名。情報通のサムの話によると、クラス一番の優等生であるカリスと隣クラスのユート、ゲベアに学年トップの成績保持者であるカラビもベルディナ大導師のラボに希望を出したとのことだった。

サムの口から出た名前はそれだけだったが、エダの情報によると私を含め15名ほどが名乗りを上げているらしい。私を除くと全員が成績優秀者か、何らかの表彰を受けた者ばかりで、ハッキリ言う

と私は笑いのネタにしかならなかった。

研究の定員は学生の人数分用意されており、全員必ずどこかのラボに所属することとなるためあまりが出ることはない。しかし、人気のラボに人が集中することは避け得ないことであり、定員オーバーをしたラボは何らかの試験をするとのことらしい。

友人からの情報通り、ベルディナ大導師のラボは定員オーバーのため試験をすることとなった。

説明会より一週間後、つまり明日の昼、正午の第二の鐘が鳴るまでにベルディナ大導師のラボに集合し、課題はその時に告知しそのまま実施することだった。

それにしても、先輩方の話によるとここ数十年ぐらいベルディナ大導師は弟子を取っておらず、卒業研究の研究生を受け入れるのも今年が初めてだったらしい。導師会で何があったのかは分からないが、このことは魔法都市の一大ニュースにもなっていた。

噂では誰が合格するか賭が行われているらしく、現在の所一番人気はカラビ次点がカリスらしい。私の順位は・・・取り敢えず倍

率は最高とだけ言っておこう。

サムからはお前が合格すれば1ソートで二年分の学費になるぜと励まされた。やれやれ……。まあ、サムの期待に応えて少しは健闘できればそれで良いか。

そんなこんなでなぜか有名になってしまった私は、人目を避けるためいつもの丘へと足を運んだ。

少女はそこにいた。初めてであったときと同じ、何処かを眺めるように何も瞳に移していない。見上げるのは空なのか、遙か彼方にそびえる天嶮ボルドーミサか。

私は彼女の側に腰を下ろした。出会ったときは逃げられてしまっただが、今度ばかりは逃げる様子はない。というよりは、私という存在すら認識していないのではないか。

無遠慮にその横顔を眺める私の視線をまるで無視して、ひたすら遠くを眺めるばかり。

何が楽しいのか。私はそう聞いてみたかったが、今の状態で声をかけるのははばかれた。ならばどうするか。彼女の方から声をかけることは無いだろう。そもそもこの少女は言葉を発することが出来ないのかもしれない。

良い天気だ。つい最近まで吹き荒れていた冬の木枯らしはその後しばらく続いた春來の雨になり进行を潜め、昼下がりの今になっては穏やかな陽気に目蓋が落ちそうになる。

ならば、いつそのこと寝てしまうか。

私は毛布よりも柔らかい若草のベッドに横になり、陽光の布団を羽織った。

今日の授業は昼までで終わり、明日は終日休講で午後から試験がある。寮に戻ったところで好奇の視線に晒されることはわかりきっていたから夕食までここで横になっていればいいだろう。

そんなことをつらつらと思い描きながら私はつかの間のまどろみの中へと身を沈めた。

目を開くと既に西から強い陽光が差し込む頃だった。オレンジに染まる自分の身体を眺めながら、なぜか私はまばゆさに目をしかめる必要のないことに気がついていた。

私の頭の部分だけがなぜか小柄な影に包まれている。

はて、こんな所に何か日除けになりそうなものなどあっただろうか。見上げると逆光の中黒くたたずむそれが、まるで私の表情を覗き込むように首をかしげていた。

私は少しうれしくなり、自然に口元がゆるむ。まるで私などに興味はないと思っていた彼女がこうして私のために日除けになってくれていたことに感動さえ覚えた。

無表情に私の表情を覗き込む少女の頬に自然と私は手を伸ばした。逃げる様子はない。私は少女の頬に手を置いた。

彼女は少し驚いた様子でその手を見下ろすが、拒絶することはなかった。

なめらかな肌だ。まるで陶器人形のような透き通った肌の色に違わず、しっとりとした肌触りの彼女の頬は極上の果実すらも凌駕する。

私は手を離すと、ゆっくりと身体を起こし、少し凝り固まった首や肩を回しあくびを一つついた。

彼女は立ち上がった。おそらく、私が起きるまでここにいることを決めていたのか。私の仕草をちらつと一度だけ見るとそのまま森の奥へと歩いていった。

彼女は一体どこに住んでいるのだろうか。初めてであった次の日、私は彼女の素性が知りたくて寮を回ってみた。流石に女子寮に立ち入ることは出来なかったが、エダの話によると彼女のような少女は見たことがないという。

彼女の小柄さから考えると、確かに学園に在学している可能性は低い。ならば、孤児院か託児所か。しかし、学生身分である私には

それ以上のことは調べることは出来なかった。

少女は一体何者なのか。いつか彼女の口からそれが聞けるときは来るのだろうか。それ以来、私は彼女のことは誰にも話していない。私だけの秘密とすることにした。

(3) ベルディナ先生と噴水にて

試験の日が来た。

なるようになると思っていたながら、この日はかりは早く目が覚め友人に驚かれた。朝食の食堂にいたサムはどうやら賭の行く末をリアルタイムで知りたいというらしく、一日中ここにいるとのことだった。

情報通である彼に試験内容に関する情報はないかと聞いてみたが、流石に彼でもそこまでは分からないらしい。やれやれ、これでは本当にぶつつけ本番になってしまいそうだ。1名の定員に対して志願者が15名。単純に考えて競争率15倍あるこのレースは流石に分が悪そうだ。

試験までの暇つぶしに現在の配当を聞いてみたが、私の倍率は機能からさらに増大しているようだ。何でも、この賭は男子寮全体に行き渡り現在では女子寮にも波及しているというらしい。

教師が摘発に乗り出しているらしいが、胴元は巧妙に隠されているようで未だ犯人逮捕には至っていないと聞いた。

その筋の情報に寄れば、この賭で動く金が既に1000ソートを上回っているらしい。魔法学園にいる以上娯楽というものが学生にとっての一番の課題ではあるのは理解できるが、ここまでお祭り騒ぎにしてしまうのはいかなることか。

サムの話によれば、決まるのは勝者のみで2位、3位は度外視されるため戦略が練りにくいというらしい。そういうことはよく分かったかったので、私は彼が話すレース談義を黙って聞いておくことにした。

それにしてもこの男は、シリングバード公国の競馬通論の話を持ち出してくる以上その方面に強いことは分かるが、一体何者なのだ。あの競馬場は各国の王族や貴族の御用達で、私のような庶民には天

国より遠い世界であるはず。私は、五年間つきあっているこの友人のことがますます分からなくなってしまった。気がつく、彼の話に引き寄せられ食堂はにわかに講堂のようになってしまっていた。昼食までまだ時間がある。私は少し散歩をしようと思い食堂を抜け出すこととした。

明け方に降っていた細雨は日の出と共にりを潜め、雲間から差し込む光を反射し輝いていた。

散歩するのは好きだ。趣味の少ない私にとっては数少ない楽しみといえる。あの丘の存在に気がついたのもこの趣味が原因だったし、例の少女に出会えたのもそれがあつてのことだといえる。

最近一人になるとあの少女のことばかり考えてしまう。色惚けか？と思つてしまいそうだが、特に反論する余地はなさそうだ。

私は彼女の何を知りたいのか、知つてどうしようというのか。その答えは得られていない。

それにしても気持ちのよい朝だ。魔法都市の中央通りからギルド本部塔に続く一本道の中程に設えられた噴水は今水が止められているが、もう少し温かくなれば絶好のロケーションを演出してくれることだろう。

私はまだ人通りのまばらな道を抜けて、魔法都市の中心。魔法学園を越えてギルドの敷地内へ足を運ぶことにした。

中央に魔法ギルドを要する魔法都市は大きく分けて三つの区画に分けられている。

一つは、魔法都市の入り口に広がる市民街と呼ばれている区画だ。ここは、魔法都市の玄関口とも呼ばれる場所で、外来の旅人や魔法都市に住まう魔術士の家族等がそこに暮らしている。

魔法都市自体が交通の要所のような位置にあるため人の往来は盛んで、スリンピア王国の各地から様々なものがあつまる。かくいう

私も生活品や嗜好品、さらには授業に必要な道具や書物をここで買い求めている。

二つ目は、私が通う魔法学園の区画である。この区画は文字通り学園に通う者達によって構成され、その広さは市民街の半分ほどにもなる。故に校舎以外にも専用の鍛錬所や簡易実験施設が建ち並び私達学生は日夜修行に励む。

最後に魔法都市の中心地である魔法ギルドは、他の国で言うところの学術行政地区の色合いが強い。特にその中央にそびえる本部塔では日々魔法都市の運営や他国への対応が協議されていると聞く。

魔法ギルドには多くの研究施設とそれに従事する老若の魔術士が住まい、日々の研究に追われているようだ。私もこの一年間はそんな彼らに混じってその片鱗を経験することとなるのだが。不安はある。先のことは何一つとして分からない、それが怖い。後数刻もすれば私のその先を決定づけるであろう試験が待ちかまえているだろう。逃げ出せない状況であればまだまだ。結局それを受けざるを得ず、状況は私を無視して勝手に進んでいくてくれる。

だが、その先を自らの意志で決定しなければならない状況に立たされれば私は途方に暮れることしかできない。この学園に入れたのは父親の意向だった。私は特に興味を持っていたわけではなかったし、その頃は自分の将来など何も考えていなかった。父親の薦めと決定に従い、私は機械的に入学試験を受け、その結果どういう訳か受かってしまったと言うことだ。

しかし、学園の生活には彩りがあった。友人に出会うことも出来た。だからこそ今は悩んでいる。この先をどうするべきか、ただ悩み続けている。

思考が混濁してきた。少し休もう。どちらにせよ今悩んでも答えを得られるわけではない。ならば、試験のことに集中した方が良さそうだ。

水の出ていない噴水の間近に差し掛かり、私はその淵に腰をかけ

た。朝の細雨で冷やされた石造りそれは思考をリセットするにはちようどよいように感じられる。

そんな折、隣から声をかけられた。あまりにも思考が安定していなかったのか呼びかけられるまでそこに人がいたことに気がつかず、私はあわてて顔を向けた。

そこに座って煙草を吹かしながら私の方を珍しそうに眺めていたその顔に私は見覚えがあった。まさかこのようなところで彼に出会えるとは思ってもなかった。

目蓋の下に薄い隈を作りながらあくび混じりにコーヒーを飲んでいたのは、先日説明会で会い、これから数刻後に顔を見せることになるベルディナ大導師だった。昨晩は徹夜だったのだろうか。けだるい雰囲気で紡がれる言葉には幾ばくかの疲労が見え隠れする。

聞くと、ベルディナ大導師は今日のための試験内容を考える内に夜を明かしてしまっただけというのだ。少しばかりワインの香りが身体から漂うことに気がついたが私はあえてそれを口にしなかった。

ベルディナ大導師は、私が午後から試験を受ける学生だと言うことは知らなかった様子で、それを口にするとうろたえた。試験勉強はしたか。という問いかけにどう答えるべきかと少しだけ考えたが、私は内容が分からないからしていないぶっつけ本番で何とかするつもりだとだけ答えた。

なるほど、正解だな。と大導師が洩らした言葉を聞かない振りをしておいた。一体どのような試験が課されるのだろうか。彼の言葉からすると教科書通りの問題が出される様子はなさそうに思えた。しかし、だからといって私の不安が解消されたわけではない。

なにぶん私はサムほど人生経験が豊富ではないため、教科書以上の知識を問われても口をつぐむより方法がないのだ。

それを口にしてしまっただけだと思っただけで、ベルディナ大導師は口を開けて笑い出したことには驚いた。

知識なんてものは必要なときに手に入ればよい。問題は考え方が。仮に知識があったとしても思考力がなければ単にコレクシオン

を並べているだけのことだ。どうやらベルディナ大導師は柔軟な思考を求める質のように感じられた。

しばらく会話を続ける内に私がいかに大導師、大導師と続けて言っただけベルディナ大導師は、いちいち大導師を付けるなくてもいいといった眉をひそめた。

ならば、どのように呼べばいいのか。流石に呼び捨てにするわけには行かず、ベルディナさんというのになれなれすぎる。ならばせめてベルディナ先生と呼ばせてもらうこととした。

会話の途中からベルディナ先生の口調が次第に途切れがちになってきているのに気がついた。見ると、先生の目蓋も落ちては開きを繰り返している。

私は一度話を切り、お休みになってはどうかと進めた。ベルディナ先生は、ああ、そうさせてもらおうとあくび混じりに呟くと噴水広場から去っていった。

私はそれからまたしばらくそこにいたが昼食時も近くなってきたため寮へ戻ることにした。

(4) 試験

ベルディナ先生から与えられた課題は非常に簡単なものだった。いや、簡単そうに見えるために難しいと言っべきか。

午後の第一の鐘を聞き、私はベルディナ先生のラボを探すため魔法ギルドへと立ち入った。その時思えば、朝の内にラボを探しておけばよかったと後悔した。意外なことにベルディナ先生のラボは主要な研究室が立ち並ぶ区画から幾分か外れたところにたてられていた。

大抵のラボは研究棟と呼ばれる建物に集中し、研究者はその部屋を研究室としてあてがわれるのだが、ベルディナ先生は外れの建物の一つを使い切って自分の研究室・いや研究所と行った方が良いのかもしれない・をもっていた。

かなり早めに寮を出たにも関わらず、研究所に着いたのはなかなかぎりぎりな時間になってしまったのは、てっきりベルディナ先生のラボも研究棟の一室にあると勘違いしていたためだ。

しかし、何処を探しても先生のラボが見つからない。これはおかしいと思い、研究科の事務所に駆け込んだところ、この場所を教えられたという塩梅だ。

まったく、さい先が悪い。せめて会場には一番についてすまし顔でくつろいでやろうという計画がおじゃんだ。

研究所に駆け込んだ私を見た十四の視線はどれも私を場違いな客人を見るような目つきだった。教科書を持参していなかったのは私だけだった。他の十四人は私を一瞥するやいなや手持ちの教科書に目を落とし、すり切れた頁を一心不乱に読みふけている。

朝にベルディナ先生と出会わなければ私も教科書を持参していただろうか。いや、おそらくはしないな。

玄関口となっている小さなホールの向こうには扉が一つあるだけで、あとは隅に二階に続く階段があるだけだった。

調度品や絵画のようなものは一切見えない。飾られているものは扉の表面に貼り付けられている『関係者以外立ち入りを禁ずる』という張り紙と、『本日試験』という張り紙だけだった。

それにしても、これは誰が書いたのだろうか。ずいぶん下手な字だ。私も他人に誇れるほど上手い字が書けるわけではないが、少なくともこれよりはましだと思える。

そうやってホールを見回しているとしばらくして午後の第二の鐘の音が遠くから聞こえてきた。

ベルディナ先生はまだ現れない。あの後就寝すると言っていたことからまだ眠っているのかもしれない。

しばらくしてベルディナ先生が現れた。扉の向こうから現れる者と思つて他の者に習い扉を睨み付けていたが、先生は階段を下つて姿を見せた。

先生は私を見るなり、手を挙げて気さくに挨拶をしてくれたが、私は他の者の手前軽く会釈をするだけにとどまつた。

ベルディナ先生についてこいの一言に従い、私達はソファアから腰を上げそれに続いた。

一応私は列の最後についた。

太陽が高く昇る正午にも関わらず、ラボは薄暗い。魔法薬のせいか、部屋には一種独特の香りが充満し私は思わず鼻を覆つてしまった。

私の前を歩く者達はこの香りが気にならないのだろうか。まるで不快な表情を見せることなく物珍しそうに周りを見回している。

私もそれに習つてしばらく周りを見回してみることとした。なるほど、彼らが珍しそうな顔をするのも納得が出来る。私達は授業の一環として他の導師の研究室を何度か見学させてもらったことがある。魔法薬や宝石棚、複雑な陣が組まれている壁紙を見るのは初めてではなかったが、ベルディナ先生の部屋には今まで見たことのない術式の物が多い。私はそれほど詳しくはないのだが、見る者によつてはまるで古代術式に現代の術式を織り交ぜて構成された複合術

式だと称しただろう。しかし、この時の私には恥ずかしながらこのようなものも世界にはあるのだなと漠然と思っていただけだった。

ベルディナ先生は、ごちゃごちゃと様々な物が並ぶ部屋から別の部屋に私達を案内した。その部屋は先ほどの部屋とは違い、いくつかの本棚と何人かが座れるソファ、それに囲まれるように配置された低い机が並んだ、幾分さっぱりとした部屋だった。応接間なのだろうか。机に置かれた煙草皿と寝かされたワインのボトルに布のかけられたグラスは来訪者をもてなすためのようにも見える。

こんなに人が来るとは思わなかったんでな、と言いつつ先生は先ほどから手に持っていた何かの書類を机の上に置き、ここ以外に場所がとれなかったんだ、と言ってソファに腰を下ろした。

私達も先生の薦めで来た順番に奥から座っていくことになった。隣に座るカリスは私がまるで手ぶらであることに眉をひそめたが、それほどおもしろいものではないと思ったのか直ぐに興味を失い、先生が広げた書類に目を向けた。

先生が先ほどから目を通している書類は、どうやら私達に関する情報が記載されたものようだった。先生は、その書類を私達が座る順番に並べ直すと一番最初に来た生徒、アランの名を呼んだ。私とは反対側に座る男子生徒がそれに答え、先生は次々と異なる名前を呼んでいった。アランの次はシュバルト、次にユート、エリス、カラビと途中ゲベアとカリスの名前を経て最後にアルバート、私の名前を呼び私は単にハイと返事を返した。

全員居るな。と先生は確認すると、書類を一度脇によけた。では、試験を開始する。という言葉を受け、私達の間には強い緊張が走った。そして、ベルディナ先生が提示した課題に私を除く一四名の表情が驚愕に剥かれた。私はどうだったかというところ、実のところそれほど驚いていたわけではなかった。ベルディナ先生は教科書通りの試験を行わないだろうと言うことは先ほど述べたとおりだ。しかし、それほどと言ったことにはわけがある。ベルディナ先生は私たちに、私たちが最も得意とする魔術を見せろと告げるだけだった。

わざわざ教科書を持参して、更に先ほどまでそれを読みふけていた彼らの胸中は察するが、サムに言わせてみればこれこそが情報戦の勝利だと言うことで許してもらいたいものだ。

試験の順番は、先ほど私達が呼ばれた名前の順番に執り行われることとなった。さて、私はどうするか。

私は少ない知識の中から最も高度な魔術を検索しようとして止めた。最初に席を立ったアランが私を知る魔術よりもよっぽど高度な魔術を組み上げているのが目に入ったからだ。

私はち々と他のものの表情を伺うが、そのどれもが、あの程度なら自分も扱えるといわんばかりのものだったように思える。私は観念した。これでは勝ち目がないと思った。

だから、私は少し意識を試験から外してしまっていた。アルバートという私の名を呼ぶ声にはっと気がつき、私は慌ててソファから腰を上げた。

お前の番だ、始める。ベルディナ先生の随分と素っ気ない言葉に私は少し焦りを感じた。私は高度な魔術を知らない。私の前の者達が執り行っていた魔術も見逃してしまった。

ならば、どうするか。私はふと、サムとエダの顔を思い出した。いつか、彼らの部屋で開いたホームパーティーで私がやって見せたパフォーマンスをみた二人が、随分とそれを賞賛してくれたことを思い出したのだ。

私はニヤツと笑った。

何なら、これを披露してここにいる者達全員に愉快的気分になってもらおうかと思った。

私は暫く息を整え、手のひらを掲げた。

その手のひらに浮かぶ色とりどりの光のイリュージョン、それがあらゆる軌道を取り部屋中を駆けめぐるイメージをはっきりと確実に描ききる。

私は自身の腹の中心に眠る魔力の根元を呼び覚まし、それを胸から腕へ、その先に捧げられた手のひらへと送り込む。

ベルディナ先生は、ほお、と溜息をついて部屋を飛び回る光の渦を目で追っていた。

その光は幾十にも連なり、時には分裂し、時には融合し、形を変え、時には蝶のような形を取り、時には変哲もない球体へと変じる。私は額に汗をにじませながら、自分の魔力の続くかぎりそのイリユージョンを続けた。

その光の数が減り、最後には全てが消え去った時、ベルディナ先生は手を叩いて、なかなか面白かった。とつげ、試験の終了を宣言した。

私は汗と動悸、そして荒い息を押さえながら椅子に深く座り、ベルディナ先生の表情を伺った。

何か質問はあるか、と先生は聞くが誰も答えようとしない。本当でないのか。その言葉の奥には何かあるはずだと探るような意識があるように感じた。

私は仕方なく、挙手しこの研究室に来て一つだけ気になった事を伝えた。それは、私以外は意に介する事の無かったあの一種独特の香りだ。それを聞いた先生は、少し驚いた表情で頷くと、あれはちよつとした実験で出た匂いだ、人によつては感じないが、お前は匂いを感じたと言うことが、少し考慮に入れておくと言ってその話を切った。私は少し納得のいかないところがあつたが、先生がそういうのであればこれ以上追求することもないと思いそれ以上は口を閉じておいた。

他に質問がないようなので、私たちは解散を告げられ研究所を後にした。

今日ばかりは少し疲れた。あの野原に行くのはやめにしよう。私は寮に戻り、そのままベッドに入るとすぐに眠りについてしまった。

(5) 先生の呼び出し

その朝、私の元に届けられた通知を見て、私は驚愕せざるを得なかった。いや、私だけでない学園中が驚愕したと言ってもこれは過言ではないだろう。

その通知にはこう記載されていた。アルバード・ホーキングをベルディナ研究所の研究員とする。簡素な文体で書かれたそれを何度見直しても記載されている文字が変わることはない。

どうやら、私は、サムに大儲けを呼び込んでしまったようだ。

食堂に朝食を取りに来た私は、何とも言えない視線を感じ、サムからは抱きつかれた。

いったいどんなトリックを使っただのかと、そこにいる者達全員から聞かれたことに私は素直に答えることにした。私が試験で行ったことを聞いてサムを始め、騒ぎの見物に来たエダ、そのほかクラスでは比較的仲の良い友人までもが目を丸くしていた。

なるほど、この表情を見られただけでもやった甲斐があったというものか。

私は居心地が悪くなる前に朝食を済ませ、一人食堂を後にした。私にはすることがあった。通知書に添付されていたベルディナ先生からの手紙によると、朝食後速やかに彼の研究所に出頭せよとのことだった。

特に時間が指定されていたわけではないが、朝食後速やかにといわれてしまえばとにかく急いだ方が良さだろうと思い、食後の談笑をキャンセルして先生の研究所に向かった。

今日は重要な講義が2つほど入っている。どちらも午後からのものだったが、これを落とせば幾ら所属試験に合格したとしてもその努力……といったもさほどの努力はしていないが……が水泡に帰す事になる。

長い話にならなければよいが、と私は考えつつ先生の研究室のド

アを叩いた。

入れ、という声にこたえ私は、失礼しますと一言だけ言って中に足を踏み入れた。

ベルディナ先生は、そこにいた。研究室の隅のソファに腰を下ろし、側の本棚の本を読んでいた。その本は私が知らないものだったが、その題名から何が書かれているかは予想がついた。

先生は本から目を上げると、私の姿を確認し、早かったなと言って本を閉じた。

私たちはひとまず朝の挨拶を交わし、先生は私を引き連れて、試験を行った部屋とは別の部屋に私を通した。

そこは、どうやら先生の執務室のようで、引き出しの多い机にも入りきらないのか、その上には大量の資料や書類が置かれてある机がその中央に鎮座していた。

先生は、簡素な椅子を私に差し出し、自分は机に備え付けられた椅子に腰を下ろした。

先生の脇に座る私に、先生は呼び立てて済まんなど一言詫びた。何でも、本来なら来週に行うはずだったことが急な用事が出来、明日から魔法都市を出なければならぬという事だったらしい。

私は一式の書類を手渡されると、来週までに事務に提出するようにいわれた。その書類にざっと目を通したところ、それは研究室配属に関する同意書と、先生が行っている研究の概要、私が担当する研究の題目とその概要が簡潔に記されたものだった。

同意書には注意書きが添付されていたので、記載には特に問題はなさそうだった。

それにしても、と私はその部屋を見回した。

導師の執務室に立ち入るのはこれが初めてだったが、他の導師もこの部屋と同じような感じなのかと私はすこし首をひねってしまった。

なるほど、確かに先生の座る机は研究や学会、導師会の議事録を始め研究費の目録やそれに関する資料に埋もれていたが、少し視線

を外すと、部屋の隅には立派なワインセラーが置かれているのが目に入る。

ワインについてはそれほど詳しくない私だが、そのラベルに記されているのはどれもこれもシリングバード産のものでそのビンテージも古いものばかりだった。

ひよっとすれば、これ一つで私の学費の一年分にはなるのではないかと思う。

その視線に気がついた先生は、あれは自分の趣味だと告白した。聞くところによると、先生はシリングバードのワインの熱狂的なファンと言うらしく、どんなに忙しい時でも一年に一度開かれるその国のワイン品評会には必ず出席するという。

欲しければ一本ぐらいはやるぞという先生の言葉に甘えて、私は極力安そうな、値札など記されていないため選ぶにはかなり苦労したが、ワインを手にとるとそれをもらうことにした。

なかなか目が良いな。と笑う先生に私はとんでもなく良いものを選んでしまったのではないかと冷や冷やした。

持ち運びには少し気を遣ったが、せっかくもらったものだしつか時間を見つけてサムとエダを呼んでやるとしよう。

研究所を出て、中庭の大時計を見た私は、思ったより長い時間先生と話をしていたのだなと気がつく。昼食時にはまだ早い、午前の講義が終わりそうな頃合いだ。あと少し時間が経過すれば、食堂は講義終わりの学生に埋め尽くされることだろうから、私は早めの昼食を取ることとした。

そうでなければ、へたをすれば午後の講義まで時間の余裕が無くなってしまいそうだったからだ。

私は急いで道を行くと、部屋の隅にワインを隠しそのまま寮の食堂へと足を運ぼうとした。たしか、書類の提出期限は来週までだったはずだ。おそらく、講義が終わるまでここに戻ってくることはなさそうだと考えた私は、とりあえず書類一式の入った封筒を手にとると、他の授業用具の間にそれを挟み込み部屋を後にした。

私の思惑通り、食堂の人並みはまばらだった。サムもエダもまだ講義から帰ってきていないようだった。私と同じ講義を取っているものもちらほらと見受けられたところ、皆考えることは同じだと感じた。

基本的にこの寮の食事代は、寮の滞在費に含まれているため、全寮制であるこの学園においては生徒に対しては無料で食事が振る舞われている。しかし、休日は閉鎖されている。よって、休日はどうしても街まで下りて食事を取る必要があるのだが、その日の調理場は立ち入り自由とされている事から自分で料理を作るものもいる。

エダは、意外なことに料理が大得意だ。彼女の気が向いた時、私が彼女の機嫌を損ねていない時には私もそれにあやかることが出来る。

そろそろ学年末であることから最近はお呼びがかからないが、近いうちにまたごちそうになりたいものだ。

この食堂の料理が不満というわけではないが、毎日変わり映えのないものばかり口にしてるとさすがに飽きがくる。料理長も何かと気にかけて、日替わりメニューを用意してくれているが、それでも同じ人間が作る料理というのはどこか味わいに共通するところがあるようにおもえる。

聞いたところによると、今の料理長もそろそろ引退を考えているらしく、後任の料理人がようやく決まりそうだとエダがいつていた。情報通の彼女のいうことには、今学期が最後の任期だというらしい。私は飽きたとはいえ、この料理長の料理は嫌いではなかった。次来る料理人がどれほどの腕なのかは知らないが、この料理を味わうことが出来なくなるのは少し寂しい。

馬鹿騒ぎが好きなサムに言って、料理長の送別会など開いてみるのも悪くはないかも知れないなど、私はスパイスのきいたグラジオン王国風の料理を口に運びながらそう考えていた。

料理を食べ終わり、暫く珈琲などを飲んで時間を潰していたが、そろそろ講義終わりの学生が多くなってきたようだ。私は、そのあ

たりで見切りをつけると、席を探してうろつろしていた一人の学生に席を譲り食堂を後にした。

講義までもう少しだけ時間があるが、サムもエダも見つけられないことから、少し早めに講義室には行つて書類を書き始めようと考えた。

さすがに丘まで行くだけの時間がないのが残念だ。風も緩やかな晴天のこの日は、昼寝日和としては絶好なロケーションであるのが惜しい。

出来れば、週末までこの天気が続いてくれると嬉しいのだが、天気の変わりやすいこの時期では期待が外されそうにも思える。

寮の少し向こう側に建てられた校舎には、まだ幾らか人が残っているようだったが、殆どのものは昼食に出ているようで、その中庭にも自前の弁当に舌鼓をうつものも多かった。

ふむ、確かにこんな日は外で食事をするのもなかなか悪くなさそうだ。今度、街で何かを買ってきて試してみようか。面白いこと好きなサムとエダなら喜んで載ってきてくれそうな気がする。

入り口近くの水飲み場で少し咽を潤し、私は校舎を出て行く学生とすれ違いながら講義室に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145f/>

レジェンド・オブ・クリープオ

2010年10月9日02時43分発行